月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１２５号　　令和元年７月９日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

九三式水上中間練習機の前で教官の説明を聴く飛行練習生
（『櫻水物語』より転載）

戦時下の土浦中学生１９　～敗戦前後～

戦中から戦後にかけて、旧制土浦中学校では疎開生徒や復員者・引き揚げ者の転入・転出が相次ぎました。1931（昭和６）年生まれの矢嶋俊雄氏は、1944（昭和 19）年に帝京中から土浦中に転入、1946 年に都立五中（現都立小石川高校）に転学されました。高 21 回松井泰寿・鴻巣茂が鎌倉市大町のご自宅で、敗戦前後のお話を伺いました。

文中の【　】内は筆者による注記です。

尾久尋常小学校

私の父小佐次は、新治郡山ノ荘村小野【現土浦市小野】の青木葉家の四男として生まれ、矢嶋家へ養子に入り、荒川区尾久で洋服の仕立屋を営んでいました。

母は、1935（昭和10）年、私が４歳の時に亡くなり、我が家は、父・姉２人と私との４人暮らしとなりました。1937年、尾久尋常小学校に入学。最初に読んだ国語読本は、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」、「コイ コイ シロ コイ」、「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」で始まっていました。７月には日中戦争が勃発、更に1941年の日米開戦と同時に、日本は、「御稜威【みいつ】天皇や神などの威光】遍き大東亜共榮圏の聖業達成」を唱え、大東亜戦争に突入しました。皇国臣民は、「八紘一宇」【はっこういう】「世界を１つの家にする。」を意味するスローガン。アジア太平洋戦争中に、日本の、中国や東南アジアへの侵略を正当化するために用いられた。】の名の下、聖戦完遂のため、否応無く軍事体制に組み込まれ、少国民と呼ばれた私たち小学生も、皇国臣民に仕立てられていきました。

1942年４月18日土曜日の昼、ドーリットル中佐を指揮官とするアメリカ陸軍航空軍のＢ25爆撃機【航空母艦から発進した。】16機が、日本本土を初空襲しました【ドーリットル空襲】。私は、友達の宮川君と学校から駆け出して【当時、土曜日の午前中には授業が行われていた。】、自宅まで避難し、押し入れに隠れました。尾久の自宅付近の民家も焼夷弾で焼かれ、死者９人、重傷者38人が出ました。近くの東京陸軍兵器廠を狙ったのだと思います。

土浦中学へ

1943年４月、私立帝京中学【現帝京大学系属帝京中学校・高等学校】に入学しました。1944年に入ると戦局が悪化し、家屋の強制疎開が始まり、近くの家が撤去されたことやドーリットル空襲のこともあって、父の郷里に近い、山ノ荘村小高【現土浦市小高】へ疎開することになりました。尾久から小高まで、家族総出で、荷車を引いての引っ越しでした。

引っ越しを終え、私は、1944年４月に土浦中学２年生【中48回】に編入されました。初めて見た真鍋台の校舎は、東京でも見られないような立派なもので、びっくりしました。小高から徒歩で筑波線【土浦駅と岩瀬駅(桜川市岩瀬)とを結んでいた筑波鉄道(現関鉄筑波商事)の鉄道路線。1918(大正７)年に開業し、1987(昭和62)に廃止された。本紙第55・56号に既述した。】の常陸藤沢駅【現つくばりんりんロード藤沢休憩所】に出て、真鍋駅【現関鉄本社東側のバス車庫付近】まで乗り、真鍋の坂を登って登校しました。小高から通学していたのは、私と先輩、そして土浦高女生の３人だけでした。

1943（昭和18）年当時の筑波線の常陸藤沢駅
駅舎には「欲しがりません勝つまでは」・「進め一億火の玉だ」の戦時ポスターが貼られている。
（関東鉄道株式会社提供）

英語の最初の授業で、長谷川勝信先生が、「usually ＝遊女有り」と板書して、発音の指導をされたことを今でも覚えています。東京育ちで訛りが無かったためでしょうか、発音を褒められ、英語の時間には必ず教科書を読まされました。

軍事教練では、三八式歩兵銃を担いでグラウンドを匍匐前進し、藁を巻いた杭をアメリカ兵に見立てて、「突っ込めー！」の号令で突撃しました。刺突に失敗すると、配属将校の鉄拳ビンタが飛んできます。夏休みの宿題には、「我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある」で始まる『軍人勅諭』全文の暗誦と墨書臨書とが課せられました。

次第に、戦局は逼迫。７月から４年生【中45回】が航空廠(第一海軍航空廠)へ、５年生【中44回】が東京電機或いは中村鉄工所へ通年動員となり、学校が寂しくなりました。私たち２年生も、農繁期の援農作業や霞ヶ浦海軍航空隊飛行場での草刈奉仕、霞ヶ浦造船所【土浦駅東側第２ドックにあった木造船の造船所。敵の潜水艦からの攻撃によって、船舶の損耗が激しくなり、輸送船として、木造船までもが必要とされるようになっていった。】での作業に駆り出され、授業どころではなくなっていきました。

翌1945年１月８日、54歳の父が結核で逝き、矢嶋家の菩提寺である田宿町【現土浦市大手町】の東光寺に葬りました。

学業を終えた姉２人が、父のミシンを踏んで、裁縫の賃仕事を始めました。一家の働き手を失った家計は苦しく、中学の先輩から懇請されたこともあり、応召する藤沢村【現土浦市】の少尉に、家宝の備前長船清光の１振りを提供し、米１俵を頂きました。食うためとは言え、先祖伝来の名刀を手放してしまいました。

航空廠（第一海軍航空廠）

１月30日、３年生【中46回・47回】が航空廠へ入廠し、３月には、私たち２年

生にも動員の命が下りました【3月3日に2年生の出動に対する壮行式が挙行され、7日に4学級全員が航空廠へ入った。】。遠方で通勤出来ない私たちは、大岩田にあった寮から航空廠に通いました。寮は平屋の2棟建で、1棟が16室、1室12畳の部屋に5人が押し込まれました。

【養成班に次いで教育班での基礎訓練を修了した】私は、飛行機部銅工班宮本組に配属されました。作業は、零戦や九三式水上中間練習機の破損修理、人間魚雷「回天」の整備等でした。水上機のフロート修理では、破損した部分に女子工員が外から金属板を当ててビスを打ち込み、体の小さい私がフロートの中に入ってビスの頭を潰して、金属板を固定しました。

寮生の昼食は、弁当部で作って各職場に配られました。木製の弁当箱で、中身も粗末なもので、私たち中学生は、コジ弁(乞食弁当)と呼んでいました。私が当番で受け取りに行くと、炊事のおばさんが、いつも私には2個呉れたので、フロートの中に隠れて食べていました。

2年次の修了式もないまま、4月に3年へ進級。5月には土中生7人が選抜され、海軍香取航空基地【現在の千葉県匝瑳市と旭市とに跨る地にあった。】へ10日間ほど動員されました。作業は、局地戦闘機「雷電」への電探(レーダー)取り付けです。私は、そこで山口県厚狭出身の福久海軍兵長と知り合い、面倒をよく見てもらい、義兄弟の契りまで結びました。

香取から戻ると、学徒出身の少尉との出会いが待っていました。航空廠での修理を終えた飛行機には、隣接する霞ヶ浦海軍航空隊での試験飛行が行われ、合格すれば戦場に送られ、不合格とされると工場に戻されます。そのため、航空廠の工場へは航空隊の隊員や飛行機を受け取りに来た特攻隊員たちが、修理中の飛行機を見に顔を出していました。少尉もその中の1人だったと思います。少尉は、私を弟のように思ってくれ、会う度に飛行服のポケットから、「これ、食ってみろ!」と、外国製のチョコレートをそっと渡してくれました。航空隊の宿舎に連れて行かれた時には、寝床のハンモックの下で、「平和になったら、岩波文庫の一つ星を読め。」と奨め、伊藤左千夫の『野菊の墓』のストーリーを話してくれました。寮の門限を心配して、早めに送り出してくれましたが、私のポケットはお菓子で膨らんでいました。しかし、少尉は、突然姿を見せなくなりました。菊水作戦で沖縄へ特攻出撃し、散華されたことを半月後に知りました。

敗戦

8月15日は、朝から焼けるように暑い日でした。正午前、格納庫前の広場に集められ、玉音放送を聴きました。前方では、普段見かけない将校たちが、神妙な顔をして整列していました。ラジオの声が消えると、啜り泣きの声が聞こえてきました。

8月20日、男子学徒・女子工員の退廠式【女子学徒と女子挺身隊員とは18日に退廠した。】が行われ、2年生以上の航空廠出動土中生も、式に臨みました。翌日、私たち土中生は、第二工員宿舎前で物資の特配を受け、毛布を担いで寄宿舎を後にしました。

東京へ

父が亡くなってから、姉2人が、近所の繕い物などの裁縫仕事で生計を立てていましたが、私の授業料も払えない状況になり、翌1946年に、焼け残った東京の実家へ戻ることにしました。食糧難のために、東京への転入抑制策が採られていて、転入が認められない状況でしたが、姉が、両親が居ないから、と区役所に頼み込んで、漸く転入が認められました。空襲を免れた、人に貸している実家の1間を空けてもらい、3人がそこで暮らすことになりました。

私は、都立五中の3年生に編入してもらいました。本来ならば4年生ですが、勤労動員等で授業を受けていないので、五中の校長が、3年が適当だと判断したようです。五中に編入はされましたが、極度のインフレで生活が苦しく、五中に通う余裕はありません。中華料理店の小僧、サロンボーイ、肉のスエヒロの小僧等々、とにかく食うために、何でもやりました。アメリカ軍の軍用品の横流しもしました。これは、新宿の帝都座5階の劇場で、劇団「空気座」の『肉体の門』を観ていた時に、アメリカ軍の軍曹から声を掛けられたのがきっかけでした。私は演劇が好きで、なけなしの金を叩いては、劇場に通っていたのです。片言の英語で答えたら、英語が分かると思ったらしく、彼が横流ししてくる、米軍の軍服・靴・靴下、石鹸・タバコ等の軍用品を売り捌いてくれ、と言うのです。売上金は折半で良い、との条件でした。そこで、新橋や横浜桜木町の闇市で売り捌きましたが、桜木町でアメリカ軍のMP【Military police】に見付かり、職安【現ハローワーク】のトイレに隠れたこともありました。

その後、食うために、20数種の職に従事しました。その間、五中には行けず、除籍になったようです。何とか落ち着いてくると、大学に行きたくなりました。土浦中学に学歴証明をしてもらい、大学入学資格検定を受け、1951(昭和26)年、早稲田大学文学部2部(夜間部)に入学しました。親類から、「お前の顔では演劇は無理だ。」と言われ、仏文を専攻しました。昼は厚生省大臣官房総務課に勤め、夜は大学です。しかし、ここでも学費が続かなくなりました。総務課の課長が援助を申し出てくれましたが、人の情けは受けられない、と断り、義兄弟の契りを結んだ厚狭の福久さんからの「山口に来い!」との誘いも断りました。大学にも行けなくなり、職場も水道橋の結核予防会に変わりました。水道橋は神田の古本屋街に近く、そこには出版関係の会社もたくさんありました。そのうち、出版の仕事がしたくなり、予防会を辞めて、小さな新聞社の校閲部に入りました。出版の仕事が性に合っていたようで、その後、中央公論、筑摩書房、番町書房を経て、新潮社に入社しました。

新潮社でも校閲部で、文庫・新書・選書から週刊誌(『週刊新潮』や『フォーカス』等)まで、殆どの出版物の校閲に当たりました。校閲とは、誤字脱字のチェックは勿論、文章の内容が正しいものかどうか、事実確認をする仕事です。そのため、校閲の仕事は、細かい作業の繰り返しになります。人名や地名、歴史的な内容、数値等の記載事項が正確か否か、様々な参考資料に当たって確認していきます。更には、読者を不快にさせる表現や誤解を招くような表現がなされていないか、差別語が無いか、というところまで細かくチェックしていきます。校閲は、集中力と根気との要る仕事ですが、読者が安心して読める紙面を作ろう、と取り組みました。多少なりとも、洛陽の紙価を高め、新潮社の出版物の質を支えることが出来たのではないか、と自負しています。

60歳で定年を迎えると、岩波書店から誘いがあり、広辞苑の校閲や漱石全集・荷風全集等の日本文学全集の校閲・出版に携わり、73歳まで勤めさせていただきました。

(高21回　松井泰寿)